

(仮)笠原義務教育学校の開校に向けて

0 根幹

「児童生徒と職員、保護者と地域、学校に関わる全ての人の幸せを実現する学校」を、今後の開校準備における根幹とすることを提案する。笠原小学校、中学校の、150年に亘る教育の歴史、直近十数年の幼保小中一貫教育の営み、「笠原の子は笠原のみんなで育てる」という地域の決意は、全て笠原の子の幸せな今と未来への強い願いに取れんしていると捉え、開校に向けた様々な意志決定の根幹としたい。

児童生徒も職員も、今後の社会を、自分の自分らしさを受け入れ、大切にしながら笑顔で生き進めていくことができる。そんな力の基礎を身につけられる。これが「幸せを実現する学校」の定義である。テクノロジー、エネルギー、環境、食料、感染症等、社会の変化と、それらが学校教育と個の生活にもたらす予測困難さは増大するばかりである。教育の手法や、児童や保護者に対するスタンスを含め、これまで大切にされてきた価値を継承、堅持する時代から、創造、再定義する時代へと大きくシフトしていることを強く感じている。これまでの教育の営みのよさを引き継ぎつつ、今後の時代を生き抜くために必要な力を明確にし、それを踏まえて開校準備に当たっていきたい。

1 小中両校の現在

(1)笠原小学校

①学校の教育目標

やさしく かしく たくましく

②経営方針

心の宝物に満ちた学校に 自立力と共生力の育成を軸として

児童の自己肯定感の育成と伸長を中心に置き、なりたい自分への歩みと伸びを確認しながら教育活動を推進している

③核となる活動

四つの宝物(挨拶 掃除 英語 読書)

(2)笠原中学校

①学校の教育目標

深く考え探求する 豊かな心を持ち協力する 心身をたくましく鍛える

②経営方針(めざす生徒像)

「はあとふる」笠中(はげましあい自分も伸びる あいてを思いやる ともだちと認め合う ふあんな時は相談する るーるを守る)

夢を抱き、他者と協力しながら努力できる生徒の育成をめざし、教育活動を推進している

③核となる活動

四本柱(はあとふる挨拶 はあとふる学習 はあとふる清掃 はあとふる合唱)

(3)両校の共通点

令和4年6月21日(火)

小中一貫教育研究会校長部会資料 加藤智夫 鈴木稔朗

両校とも「心」の育成をめざし、児童生徒と職員、保護者が共有する合言葉を掲げ、核となる活動を明確にし、値打ちある事実と、その言葉や行動を支えた思いを価値付けることで、自己肯定感の伸長をめざしている。それが、その子が「夢」や「なりたい自分」に向け、他者と協力しながら生き抜いていく力の基盤となるという願いも共通している。

2 義務教育学校で培いたい力と願う児童生徒像

令和3年1月23日の中教審答申「令和の日本型学校教育」では「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができる」資質・能力の育成が求められている。このことと、現在の笠原小学校、中学校それぞれの教育活動を踏まえ、(仮)笠原義務教育学校で培いたい力と願う児童生徒像を次のように提案する。

<A案>

「自立と共生 ～ めんどうでもがんばる子 ちがってもわかりあう子」

<B案>

「自立と共生 ～ いどむ子 わかりあう子」

(めざす子ども像の表記に、逆説表現を用いるか否かについては今後ご意見をいただきながら共有できればと考えている)

今後の予測困難な状況の中で、個が幸福に生きていくためには、一人一人に「よき選択」をする判断力と、実行する行動力(自立力)、自他は違うこと、どの子もかけがえのない存在であることを理解し受け入れ、お互いが折り合える納得解を創造する力(共生力)が必要になると考える。

自分のよさやかけがえのなさを信じる気持ちを心のどこかに確かにもち、それを基盤に、児童生徒が主体的に、自立力につながる、共生力につながる考え方を、言葉や行動を選択できるよう、全教育活動のねらいと評価の観点を自立力と共生力の育成に焦点化する。

その観点が認められたことで、更に自立的、共生的な考え方や行動への意欲が高まり、自己肯定感が確かになっていく。より強化された行動がまたほめられる。保護者にも伝えられて家族で喜びが共有され、有用感が更に高まる。励まされ、また行動が強化される。そんなループが9年間に亘って創り出されることで、自立力と共生力、自己肯定感が高まり、児童生徒の今と未来の幸せを支える力のある学校が実現すると信じて提案する。